

新刊紹介

食と科学技術 (食の文化フォーラム 23)

梶重正一 編

ドメス出版, A5判, 237頁, 2005年9月発行

本書は、魚の養殖技術、遺伝子組み替え植物、食品保蔵、食品加工、各種調理用家庭電化製品、食の安全性、食の文化等の章から構成されている。本書を繙くと、近年、食の分野で使われている様々な新技法の今がよく見える。しかし、ここに解説・紹介されている現実と出会ったとき、読者の皆さんはどのように向き合うのか、という点についてはすべて読者自身の力量に委ねられている。

現代の科学・技術はどの局面をとってみても、その変化の速さや範囲の広さが数十年程前とは比べものにならないほどに大きくなっている。このことは、科学技術の集積量が巨大になっていることを考えれば当然のことではあるが、現代社会において衣住や交通手段など我々を取り巻く日常生活は日々様変わりしつつあるが、食に関連した分野でも同様である。

従来、『科学技術の進歩』は全て善であるとして論じられ、『進歩』を手放しで賞賛する人が多かった。しかし、『科学・技術』のもたらす負の面、社会や環境や人間に対する過剰な影響が認識される様になり、現今では「科学・技術の進展にどのように向き合えるのか」が、科学者・技術者・研究者の評価の対象に成りつつある。

日常生活の中で、食をめぐる深刻な問題が度々起こっており、論理的な科学的な解明を待たずに政治的決着が行われている。今日、本書が出版されたことは社会情勢の上で必然的な成り行きであつたろうが、同時に食に関与する研究者・教育者・技術者に諸課題を提起する結果となっている。そもそも、人間の生理的機能や生理的活動やその特性は遺伝子によって規定されており、それらの変化は進化の過程を通して起こっている。現在の科学知識・技術の変化と比べると、生物機能の進化の過程は大変にスローである。このギャップは、これまで多くの場合、無視されており、地球上のあらゆる局面で矛盾やくい違いが吹き出そうとしている。

諸々の現象には、光と影、陽と陰、プラス面とマイナス面とがある。従来の流儀では科学者・技術者は一面だけ（良い面だけ・都合の良い面だけ）を考えて研究開発や技術開発を行えばよいとされてきたが、現今・近未来の研究や技術の展開にはこのプラス面とマイナス面の両方が視野に入れられなければならない。本書で紹介されている諸分野のうちには、一面のみを目指しているために、全面的な支持を得られそうもないものもある。

われわれ食に関与する分野の科学者・研究者・技術者が根底に据えるべき規範は次の一節である。

「何にもまして、最も大切なもの・尊いものは個々人の生命である」。

(岐阜女子大学 片山洋子)

子どものための食材 Q & A

根岸由紀子, 太田百合子 著

診断と治療社, A5判, 139頁, 1,890円,
2005年12月発行

可愛いイラストの表紙が目立ち、本文も2色刷りで書かれていて見やすい工夫がされている。日ごろの栄養相談に持ち込まれる質問を取り上げ、回答に科学的な裏づけを説明する形をとっているのが、新鮮で読みやすい。質問は子どもを持つ母親の実際の相談で、なかなか厳しく鋭い内容であ

る。それに対する回答は平素な言葉で書かれているが、栄養面だけでなく、食品、調理の分野までにわたって丁寧に解説され、しかも新しい情報が正確に加えられている。質問および回答の内容が、興味を誘い、食育のすすめ方の一面を表している。

栄養相談の現場の方が、活用できる内容で一読をお勧めしたい。また、保育に携わる保育士・幼稚園教諭の方はもちろん保護者自身が読まれても興味深い内容であり、食事に対する新たな興味が湧くことと思われる。

(東京医療保健大学 峯木真知子)